

白居易「風痺」攷

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

かつて白居易の病状について論じた(1)。「白居易集(顧学頤校点、中国古典文学叢書、中華書局版、一九七九・一〇)』第三冊卷第三十五に見られる、「病中詩十五首并序の序」三四〇八に

六十有八。冬十月甲寅の旦、始めて風痺の疾を得たり。體迴(≡病)み目眩み、左足は支えられず、蓋し老いと病いは相い乗じ時に至るのみ。…外形は骸なるも内は憂患を忘れ、先ず禪觀して後に醫治に順う。

とある。ここで問題とすべき「風痺」については、前著では記述が簡単に過ぎ、推敲も不十分であったので、ここに再考することとする。

前回の論考に用いたのは、現伝の医書としては最古で最もまとまりのある『黄帝内経』であった。今回は新たに、隋代の病因病理觀を記述した『諸病源候論』(2)(巢元方、南宋版)、唐代の集学的医書である『外台秘要方』(3)(王燾、宋版)、更に国宝で、宋代の更改を経ていない点において古代の様相を窺い知ることが出来る意味において貴重な『医心方』(丹波康賴撰著、九八四年成書)を参照した。これらの書籍を参看した理由は、白居易の活躍した時代の疾病に関する理論と重なる可能性が高く、居易が用いた医学関連用語を理解する上での確であると思われるからである。

一、風痺≡中風説について

さて従来の白居易の疾病研究で、最も問題となるのは「風痺」に関するものである。従来の研究では、風痺≡「中風」説(4)が多いと思われるが、ここから論考を始めたい。ちなみに「中風≡風(邪)に中る」であり、以下本論考において、風邪は全て「ふうじゃ」であり「かぜ」ではない。「風邪は万病の元」とは、本義的に「ふうじゃ」の伝播が速く、しかも他の外邪である湿邪・熱邪・寒邪などと容易に結びつくことから、「ふうじゃは万病の元」だったのが、いつしか「かぜは万病の元」に誤用されるようになったと考えられている。

風痺を考える前に、まず中風を考える。実は中国医学では、外感病(疫病)にも「中風」の概念がある。世間が云う「中風」は一般に「卒中風(卒に風に中る)」の用語が妥当するが、『諸病源候論』では外感病を「傷寒中風」と言い、「卒中風」を単に「中風」と記している。本書卷一風諸病上「中風候」(5)を見ると、

中風とは風氣 人に中るなり。風は是 四時の氣が八方に分布し、萬物を長養するを主り、其の郷に従いて來たるは、人 中りても死病少なし。郷に従わずに來たるは、人 中りて死病多し。其の病と為すは皮膚の間に蔵し内は外に通ずるを得ず、泄するを得ず、其の經脈に入り五藏を行は、各の藏府に隨いて病を生ずる。

何となく分かりにくい文である。そこで『医心方』卷第三風病證候第一(6)を見ると

『小品方』に云う。説いて曰く、風とは、四時五行の氣なり。八方に分布し、十二月に順い、三百六十日を終わる。各の時を以て其郷に従いて來たるを正風と為し…。

と有るのを参照すれば、正風（つまりその季節本来の風）に中つた場合は死ぬことは少ないが、本来の季節に合わない風「虚風」「邪風」などと言う（に中れば死ぬことが多いという意味であることが分かる）。

発病には患者自身の体質（つまり気・血・津液の量の過不足や流れの状態）が重要であるが、一方でその直接的な誘因として風・寒・湿などの外的要因（「六淫」と呼ばれる外的な病因）、怒りなどの感情の乱れ（「七情内傷」という内的な病因）、飲食や性生活の不摂生（不内外因）などを考える必要がある。

現代医学においては中風の病因を血栓（脳梗塞）や出血（脳出血）と考えるが、中国医学では単に血管の病変とは考えず、上記条文に例示したごとく根本的な体質の問題点や発症の直接的な契機となる病因を考える必要がある。このことは『諸病源候論』の引用文を見ても理解できるであろう。

ここで『外台秘要方』を参看する。残念ながら本書は宋代の儒臣達による大規模な医書校訂作業において更改されているが、孫思邈著の『千金方』と共に唐代医書の代表であり、しかも本書は収載文献の典籍書籍名が記されていることでも貴重である。本書第十四卷「卒中風方七首」に『小品方』（六朝時代、陳延之）の引用（7）として

崔氏の小續命湯は、卒中風で死せんとするを療す。身體緩急して、口目は正しからず、舌強（しやうじやう）ばり語能わず、奄奄惚惚として、神情悶亂す。

をあげる。ここには「卒中風」の病態が明記されており、まさに死に至る可能性がある病であり、身体の麻痺、顔面の麻痺（或いは眼球偏倚を云うか）や言語障害、意識障害が読み取れる。ここに書かれている病態は明らかに白居易の詩作の病状に合わない。

現代医学の知識として脳血管障害（脳出血、脳梗塞、くも膜下出血など）が大腦で起きたならば、半身不随は大腦の傷害側と反対側に起こる。更に大腦の言語中枢は右利きの人は左大腦半球にあり、左利きの場合は右大腦にある。つまり右の大腦に血管障害が起こったとすると、左半身不随になるが、右利きの人は言語障害が起こらない。従って仮に居易の左足の障害が起きるためには、右大腦の血管に異常が生じたことになり、彼が右利きとするならば言語中枢は左大腦に在るので、想定された障害側と左右が逆であり、言語障害は起こらない可能性が高い。つまり現代医学的な脳血管障害、すなわち「中風」（厳密には「卒中風」）の解釈では、居易を中風とする説は必ずしも誤りとは言えないのだが、古典的な用語としては言語障害のあるものを「卒中風」と定義しているので、本義的に言語障害があったと見なせない居易の病態は「中風（卒中風）」には妥当しないと云うべきであろう。

一、風偏枯について

では古代中国医学（少なくとも唐代）において言語障害や意識・思考障害を伴わない半身不随（片麻痺）を何と呼んでいたのであろうか。検索した結果、『諸病源候論』巻一「風偏枯候」(8)が妥当するようと思われる。そこには

風偏枯は血氣偏虚に由り、則ち腠理開き風湿を受け、風湿が半身に客し分腠の間に在り。血氣を使って凝滯せしめ潤養する能わず、久しく差えず真氣去り邪氣獨り留まり、則ち偏枯と成る。其の状は半身不隨、肌肉偏枯は小なるも痛み、智は變らず亂れざるを言つ是なり。

現代医学が云う汗腺など皮膚に開いている穴を「腠理」といい、この腠理から風邪など

の外邪が進入すると考え、ここから外邪侵入するのを防衛するのが「衛気」と呼ばれる気の一つである。衛気が体表を流れていることなどを勘案すると、風偏枯とは概念的には衛気の異常のために腠理の間に風湿邪が客座し、そのために血気の流れが障害されて肌・筋肉を栄養出来ず種々の症状が現れていることを云うと思われる。

このように「風偏枯候」が表す病態は、半身不隨に着目すれば所謂「卒中風」に該当するように思われるが、その程度は筋肉萎縮と共に軽いという。ただ痛みを伴うとある点は疑問として残る。「風偏枯候」には上記の文に引き続き

男子は則ち左に發し、女子は則ち右に發し、若し瘡いん(おし)ならずして舌轉ずる者は治すること可なり、三十日にして起たん。

これは左「陽」男、右「陰」女と考えての論理かと思われるが、うがって考えれば左半身麻痺のものは言語障害が少ないと理解していたのかもしれない。もちろん男主体の論理としてである。ただいずれにしても言語障害のないものは回復が早いと考えていたと思われる。さらに同書巻一の「風半身不隨候」(9)の記述を見ると、

半身不隨の者は脾胃の氣弱く血氣偏虛にして、風邪乗じる所と為す故なり。脾胃は水穀の海為り。水穀の精化は血氣と為り、身體を潤養す。脾胃既に弱く水穀の精の潤養が周ならざれば、血氣偏虛に到りて風邪侵す所と為るが故に半身不隨なり。

とある。同じく血氣虚を背景とするものの、病因を風湿邪でなく単に風邪とする点が風偏枯候と異なるのだが、症状としては類似点も多い。両者を比較すれば、半身不隨は風邪の侵襲による結果であり、それ以外の痛みや言語障害、筋肉萎縮などは湿邪と結びつけているようにもみえるが、現代中国医学の知識をもってしても、風邪と湿邪の相違がこのような病態の違いを生むことはなく、こう解釈するのは間違いである。病因に多少の相違が見られるが、風偏枯と風半身不隨は同じ病態を指していると考えて良いように思われる。

飲食は胃に入り腸で(消化器を総称して「脾胃」という)消化吸収されるが、その結果として作り出される物質を「水穀の精微物質」(または「水穀の氣」、略して「穀氣」という。氣からはさらに血や津液が作られ人体を構成する物質となる。従って消化器(脾胃)の働きが低下すれば氣・血・津液の総てが不足することになり、不足「虚に乗じて風邪など種々の邪が侵入し様々な病態を発症するのである。「風偏枯候」「風半身不隨候」などが古代における表記としては、言語・思考障害を伴わないタイプの脳血管障害を意味していたと言えるのではなからうか。

居易に下肢のみでなく上肢の不調もあったことは、『白居易集』巻第二十六の「病中宴坐」三五二五に「手痺(しび)れて琴を援(ひ)くことを休(や)む」や、巻第三十五の「初病風」三四〇八に「肘痺柳(癩)を生じ」とあることから事実と思われるが、「病中詩十五首并序」には「左足不支」と下肢の不調のみが強調されており、上肢不調に関する他の記述が少ないことから、その上肢の麻痺の程度は軽かったと推測できる。ただ臨床的に脳血管障害患者で下肢の障害は重く上肢は軽い例はよく認められ、必ずしも居易の片麻痺を否定する材料にはなりえない。

二、脚氣について

だが仮に下肢の不調を主とする他の疾病を想定して検討することも試みた。すると上記した「風偏枯方」の記述が見られる『外台秘要方』の同じ第十九巻に「脚氣」の証候が並

んでいる事に気付いた。「きゃくき(きゃっき)」はビタミン欠乏症によるいわゆる「かっけ」を含むと思われるが、基本的概念はずつと広いと考えて戴きたい。以下に検証する。

『外台秘要方』第十九卷には「脚氣腫滿方」以下、脚氣関連方が八方並び、それに続いて上記した「風偏枯方」が在る。ちなみに『外台秘要方』卷十八、十九は共に脚氣についての巻であるが、そこには総計二四七首という多数の処方が記載されており、その中に有名な八味丸(10)も含まれている。「脚氣」とは、腎虚(現代に於ける気血虚を意味する)を背景因子として、腎の経絡に風寒湿邪が進入することで起きる病態と考えられており、黄帝の時は名づけて厥と為し、両漢の間には名づけて緩風と為し、宋齊の後には之を脚氣と謂った」とある。

『外台秘要方』第十九の巻頭「脚氣論二十三首」(『千金方』卷第七「論風毒状第一」の引用)の中に見られる「何を以て脚に之を得るかを論ず」(11)には、

問いて曰く、風毒 人に中るは處に隨い皆 病を作すを得る、何ぞ偏えに脚に著しきか。答えて曰く、夫れ人に五藏有り、心と肺の二藏は経絡の起る所 手十指に在り。腎と肝と脾の三藏は経絡の起る所 足十指に在り。夫れ風毒の氣は皆 地にて起るなり。地の寒暑風濕は皆 蒸氣を作り、足は常に之を履く。風毒の人に中る所以なり。必ず先ず脚に中り、久しく差えず、遍に四肢腹背頭項に及ぶなり。微時には覺えず、痼滯して乃ち知る。經に云う次傳、問傳は是なり。

とある。水液代謝は肺・脾・腎の三臓が主るが、特に重要なのは脾腎であり、上記のようにこれらの経絡は下肢と関わるので、風湿邪の害は下肢に及ぶことが多いという論理である。

同巻の「之を得る所由を論ず」(12)を見ると、

凡そ四時の中、皆濕冷の地に久立久坐を得ず、亦た酒醉に因りて汗出ずるを得ず、衣靴襪を脱ぎ、風に當り涼を取るは、皆 脚氣を成す。若し暑月に濕地に久坐、久立する者は、則ち熱濕の氣が経絡に蒸入し、必ず熱を發し四肢酸疼し煩悶するを病む。若し寒月に濕冷地に久坐、久立する者は、則ち冷濕の氣が経絡に上入し、病い發し則ち四體酷冷し轉筋す。若し風に當り涼を取り之を得る者は、病い發し則ち皮肉頑痺し、諸處詩動し、漸漸と頭に向つ。

とあるが、ここに見られる多湿環境での生活や飲酒歴は、まさしく居易の人生そのものであることは前著(文献1)で指摘したところである。つまり居易はまさに「脚氣」を起す必然があつたといえる。

さらに興味深いことは、続く「風毒脚弱痺方六首」の中に『千金方』よりの引用として「越婢湯、風痺脚弱を療する方」と「風痺」の詞が見られ、また次の「脚氣寒熱湯酒方一十首」(13)にも

風痺にて行く能わず、更生散數劑を服し、及び煎療するも力を得ざるは、此の一劑を服すれば便ち能く遠行す。一、兩劑を過ぎざる方。松葉六十斤。右一味を咬咀し水四石を以て四斗九升を煮取る。…之を飲み醉を取る。此の酒力を得る者は甚厭にして神妙なり。(並出第七卷中。)

と、風痺の語と共に松葉酒を『千金方』卷七より引用している。さらに「脚氣痺弱の方七首」(14)にも

『千金方』松脂散、一切の風及び大風脚弱風痺の方を主る(*小高注・『千金方』では

「一切の風及び大風脚弱風痺を治する方」…松脂三十斤を取る。

と、今度は全ての風疾、風痺に対し松ヤニを用いた散薬の処方あげられている。居易が「病中詩十五首」の中の「枕上作」で、「風疾による血凝筋滞不調柔」に対し「腹空けば先ず松花酒を進め」と書いていることは周知である。この松花酒は『元和紀用經』(唐、王冰)に初出で、薬効は「風眩頭旋、腫痺などを治す」ことにある。以前より(15)眩暈に悩まされていた居易が松花酒を常用していたことは考えられるが、専門的には脚氣に対し用いるには「松葉酒」や「松脂散」(或いは酒)が松花酒より適当であったと思われる。ちなみに生薬字では、松葉は梁代の陶弘景が参看した『名医別録』(成書三世紀)に既に「風疾瘡を治す」と記載があり、後代の『本草綱目』(李時珍、一五九八)には「風痛脚痺を去る」と記述されている。松脂(或いは松香)は、現伝最古の本草書である『神農本草經』(森立之説、秦一前漢に成書。五〇〇年頃陶弘景により再編集)に「疽惡瘡を主る」とあり、現代では「去風燥湿、排膿拔毒、生肌止痛」とまとめられている。松花(松の花粉)は『新修本草』(唐・蘇敬、六五九)が初出で、松関連生薬の中では本草書に記載されたのは最も遅いが、それでも刊行された年代から考えて、居易の頃には知識として流布していたと思われる。薬効は「去風、益氣、収斂、止血」で「頭痛目眩泄瀉下痢」などが主治であり、上記したように風痺より従来悩まされていた頭痛眩暈への適応が大きいといえる。

これらの記事の初出本である『千金方』について検討する。正式名は『備急千金要方』(唐・孫思邈、六五二年脱稿、宋版、オリエント影印本)であり、著者孫思邈(五八一―六八二)は医王と讃えられ後年『千金翼方』(六八一年脱稿)も著している。孫思邈は医学のみならず儒・佛・道教に造詣が深く長命であったとされ、その点においても白居易(七七二―八四六)が尊崇していた可能性が考えられる。孫思邈の生没年には諸説有る(16)が、一応上記としておく。

唐代に刊行され居易の時代には存在していた『外台秘要方』或いは『千金方』に、「脚氣」関連事項の中に、松関連の処方と「風痺」の字句が屢々用いられているのは驚きである。なぜならここに見られる「風痺」の言葉は、疼痛疾患を意味する痺証としての用法とは異なるからである。下肢の失調を示す「脚氣」の病因として風邪を考え、そこに「痺れ」の意味として風痺の字句を用いたように思われる。風痺の検討の詳細は次項を参照されたい。

風痺の検討に入る前に、総括的に『外台秘要方』第十九卷「風湿方」の項(17)を見る

中風、偏枯、風痺、風懿、風痺を辨ず。偏枯者とは、半身偏りて不隨、肌肉偏りて用いられずして痛むも、言は變らず、智も亂れず、病は分腠の間に在り、温めて臥し汗を取り、其の不足を益し、其の有餘を損じれば、複するも可なり。風痺者とは、身に痛み無きも、四肢は收らず、智亂れず言(障害)甚しからざるは、微かに療す可きを知る。甚しく言能わざるは、不可治なり。風懿者とは、奄忽にして人を知らず、咽中塞がり室窅然として、舌強ばり言能わず、病は藏腑に在り、先ず陰に入り後に陽に入る、之を治するには先ず陰を補い、後に陽を瀉し、其の汗を發し身が軟に轉じる者は生き、汗出でず身直なる者は七日にして死す。風痺を病み己む可からざる者は、足は氷を履くが如く、時には湯に入るが如く、腹中や股脛が淫灑し、煩心して頭痛み、嘔眩し、時時と汗出で、目眩して悲恐し、短氣して樂しまざるは三年を出でずして死す。

と諸疾病の弁別が書かれている。この中の風懿は言語障害があることから居易には妥当し

ない。やはり偏枯に痛みを伴うと有るのが問題点として残る。風痺は次に考える。

4 「風痺」について

本題に入る前に、まず「風痺」の軽症が対象疾患になり得るようなので、あらためて「風痺」を『外台秘要方』で詳しく見る(18)と、

『諸病源候論』の記述。風痺の状は、身體無痛にして、四肢収まらず、神智は亂れざるも、一臂(小高注。肘、腕)が不隨なる者は、風痺なり。時に能く言う者は、治するも可なり。言う能わざる者は、不可治なり。(出第一卷中)

『千金方』の記述。風痺を療する方。風痺者とは、卒して語る能わず、口噤し、手足不隨にして、疆直ならざるは是なり。方は伏龍肝五升(末)を…。(出第八卷中)

『古今録驗』の記述。西州續命湯は風痺に中るを療す方。身體自から収まらず、口は語る能わず、冒昧として人を識らず、痛む處を知らず、但だ拘急して中外皆な痛み、轉側を得ず、悉く之を主る。

を考えると、出典により痛みの有無や四肢不隨に大きな違いが見られ、定義に混乱がある。『諸病源候論』が言うように痛みは伴わず、言語障害が一時的な軽症のタイプであったと考えれば、「風痺」と考えても居易の病態に矛盾はしないが、記述をよく読めば下肢より腕の失調の方が主のようで、やはり居易には妥当しないと考えた方が良いであろう。

では次に居易自身が記述している「風痺」をより詳しく検討する。前稿にも記したように「痺証」とは現代医学では慢性関節リウマチ、痛風、神経痛などの疼痛を主とする疾患群を言い、その病因が風邪によるものを「風痺」と称する。

『諸病源候論』卷一「風濕痺候」(19)には、

風濕痺の病状は、或いは皮膚頑厚、或いは肌肉酸痛す。風寒濕の三氣が雜して至り、合して痺と成る。其の風濕の氣が多くして寒氣が少なき者は、風濕痺と為るなり。血氣虚に由り、風濕を受け、此の病と成る。久しく差えざれば、絡經に入り、陽經に搏せば、亦た變じて身體手足不隨たら令む。

と有る。「或いは…」という記述では、疼痛は必ずしも伴わなくても良いことになり、上記の一般的概念から考えてもこの記述は意外なものを含んでいる。

さらに同書「風痺候」を読む(20)と、

痺は風寒濕の三氣雜して合して痺と成り、其の状は肌肉が頑厚(の感じがする)か或いは疼痛し、人體の虚に由り腠理開くが故に風邪を受けるなり。病が陽に在れば風と曰い、陰に在れば痺と曰う。陰陽俱に病めば風痺と曰う。…冬に痺に遇う者は骨痺と為り、則ち骨重くして擧ぐる可からず、隨ずして痛む。骨痺が已まざるに又邪に遇えば則ち腎に移入して其の状は喜く脹れる。

上記した拙稿(文献1)にあげた『靈樞』の条文と相同の字句が見られ、必ずしも痛みがない場合もあるように記述されているが、後半に居易のように冬に発症すれば、病邪が腎に入り「骨痺」になると書かれている。これは『黄帝内経・素問』長刺節論篇第五十五(21)に見られる

病が骨に在れば、骨重く擧ぐ可からず、骨髓酸痛し、寒氣至れば、名づけて骨痺と曰う。

五行の冬（寒）＝腎＝骨の関連からの言葉であるが、やはり痛みが主徴候であり、居易の詩作に疼痛の記述が見られないことから「痺証」は否定的と云わざるを得ない。更に確認するために『諸病源候論』「風痺手足不隨候」を読む（22）と、

風寒湿三氣が合して痺と為る。風多い者は風痺と為り、風痺の状は肌膚盡く痛む。諸陽の經が盡く手足に起り身體を循行すれば、風寒が初め肌膚に客し痺と為るを始まりとし、後に陽經を傷り其の虚處に隨いて停滯し、血氣と相搏てば血氣は行ること遅緩にして機關を使得弛縱せしむ。故に風痺にして復た手足不隨なり。

と、当初肌膚痛として見られた症状が、さらに諸陽經が傷害されると四肢不隨を来すことが明記されている。居易の詩を読むと、左足の不隨と柳（＝瘤）を生じた肘痺や「手痺休援琴」（『病中晏坐』三五二五）などと書かれ、「痺」の字句が使われているが、痛みの記述は全くない。居易が使う「痺」はいわゆる「痺証」の意味ではなく、単なる「しびれ」の意味のように思われるが如何であろう。さらに居易が自分の病態を『千金方』などの医学書で参看したとすれば、これらの書物の「脚氣」の項を見て、自分の病氣を「脚氣」と考えるに至り、そこに上記したように「風痺」の字句が用いられていたことが、彼の詩作に「風痺」の字句を用いた理由であるとも示唆されるのである。以下に述べるように風痺の本来の中国医学に於ける意味が異なるにもかかわらずである。

「柳」に関しては上記拙稿では読み違えたが、下定の指摘（23）のように、『莊子』卷六下第十八至樂に「瘤」の意味での普通の用例として

俄に柳が其の左肘に生じ、其の意蹶蹶然として之を惡む。

がある。他に宋代以前の医書を渉獵したが同様の用例は見られなかった。だが殆どの医書が宋代に書き換えられており、正確な検索とは成り得ないと言える。

このようにリユーマチ結節を思わせる記述があるとはいえ、疼痛がないことからリユーマチなどのいわゆる「痺証」（「風痺」も含む）である可能性は低いと云わざるを得ない。

5 頭風について

ここで視点を变えて、上記したように居易がしばしば記している頭眩（目眩、目昏、頭風も同意）を考えることにする。『諸病源候論』「風頭眩候」（24）には

風頭眩する者は血氣虚に由り、風邪が脳に入りて目系に引く故なり。

と、血氣の虚に乗じて風邪が入れば眩暈を来すと書かれており、素体血氣虚を持つ居易の基礎病態を考えれば十分妥当なことであり、詩作と合致する。

ただ注記すると、日常の臨床経験からは、目眩の直接的な病因は「痰濁阻竅」である。

つまり清氣が脳や耳など平衡感覚と関連する部位へ十分に環流することを、痰飲と呼ばれる湿邪（これは飲食の過剰摂取などの不摂生や、陰湿の地に居住することで生じる）が阻害するために目眩が起きるのである。居易の基礎病態に痰飲の存在が示唆されることは前稿で指摘してある。さらに付記すれば、この湿邪は四肢不隨の原因ともなりうるのである。

次に『医心方』卷第三風病證候第一（25）を再度参照すると、

『小品方』に云う。説いて曰く、風とは四時五行の氣なり。八方に分布し、十二月に順い、三百六十日を終わる。各の時を以て其郷に従いて來たるを正風と為し、天地に在るを五行と為し、人に在るを五臟の氣と為すなり。萬物生成の順う所、毒厲の氣に非ざるなり。人當に觸を過ち、其の氣に勝たざれば乃ち之を病むのみ。病と雖えど然

るに自と瘥える者有るなり。治を加えれば則ち癒え易し。其の風 時に非ず至る者は、則ち毒風と為すなり。治せざれば則ち自から瘥える能わず。今 則ち其の證を下の如く列す。

として四季に応じた各証候を記す。居易が発症した冬の項を示すと、

冬は壬癸水、北方寒風。之に傷らる者は腎風為り。腰股四肢腎俞の中に入り、多汗惡風、腰脊骨肩背頸項痛を病み、久しく立つ能わず、便出るに曲て難く利せず、陰痺れ、之を按ずるも小便を得ず、腹脹り、面整（旁注：普江反、面皮起貌）するも然るに澤有り、腫れ、時に眩み、顔色黒し。人を令て厥と為らしむ。

「厥」とは四肢厥逆の略で、氣血の運行不良による厥冷などの証候を言う。ちなみに居易の詩作「三四〇八病中詩并序」の「厥疾少間」を一般に「厥（その疾）やまい）少（すこ）しく間（い）ゆ」と読むようだが、厥を医学用語「厥」と見なしても問題ないであろう。

『医心方』同卷「治頭風方第七」には、まず先に記した『諸病源候論』の「風頭眩」の定義を記すのみで、直接「頭風」の定義には触れていない。そこで直接『諸病源候論』を参照すると、卷之二風諸病下に「頭面風候」(26)があり、

頭面風とは是れ體虚にして諸の陽經脈に風が乗する所と為すなり。諸の陽經脈は頭面に上走す。運動勞役して陽氣發泄すれば腠理開き、而して風を受ける。之を首風と謂い、病状は頭面に汗多く惡風す。病甚しければ則ち頭痛む。又新たに沐して風に中れば則ち首風と為す。又新たに沐して頭末だ乾ざるに以て臥す可からず、頭重く身熱し反つて風を得て則ち煩悶せ使む。其の脈を診れば寸口は陰陽表裏が互に相乗じ、風が首に在る如く久しく差えず、則ち風が腦に入り變じて頭眩を為す。

養生方に云う。飽食して仰臥すれば久しくして氣病み頭風と成る。

このように種々の原因により、頭顔面部の発汗異常、頭痛、眩暈などを来す疾患の総称を「頭風」と呼んでいることが分かる。本章の次には「風頭眩候」があり、両者の関連性がうかがわれる。

上記した『医心方』治頭風方第七の風頭眩の記述に続いて(27)、

(『耆婆方』に)又云う。人の風氣、風眩、頭面風、頭中風の病いを治するは六時散方(具体処方省略、以下同じ)

又云う。人の風氣、風眩、頭中風病、中風脚弱、風濕痺の病を治するは七星散方

又云う。人の風氣、風眩、頭面風、中風、濕痺脚弱、房少精の病いを治するは八風散方

のように、頭風とは容易に一層重篤な病態に発展する可能性を持った状態であることが分かる。つまりまとめれば居易の「病中詩十五首并序の序」に見られる疾病は本質的に「風病」の範疇であり、「風偏枯」或いは「脚氣」などが診断名としては考えられ、いずれも外因としての風(寒湿)邪を直接的な病因とする。もちろん素体としての氣血不足、腎虚などの虚弱な部分、さらに習慣的な飲酒や湿潤な土地での居住などが誘因となっている。

なお大和九年の「二月一日作贈韋七庶子」三〇一五に見られる「去冬病瘡瘡、將養遵医術」の「瘡」について付記しておく。『呂氏春秋』至忠篇に「瘡」の病についての記述があり、一般には字義を頭痛のこととすることが多いが、時には「瘡」は「瘡」のこととして

瘡濁＝消渴と考えられる場合もある。瘡に関しては「移精变氣」と絡めて既に考察(28)した。

居易の詩作では「瘡」という外科的な疾病と併記されており、諸橋の『廣漢和辞典』に見られる「うちきず」の意味が妥当するかと思われる。

【結語】

1 居易が詩作で述べている病態を医学用語でまとめれば、血気の虚に乗じて風邪が入る「風病」であり、特に頭部への侵入の結果である「頭風」が従来より悩まされていた頭痛眩暈の病名である。

2 風病はさらに重篤な病態を引き起こすが、「病中詩十五首并序の序」に見られる病態は「風偏枯」或いは「脚氣(きゃくき)」などが診断名として考えられる。

3 唐代に刊行されていた総合医書である『千金方』は、その著者孫思邈と居易の思想の類似性から、居易も見ていた可能性が示唆される。本書の「脚氣」の記述には、居易の「病中詩」に記されている「風痺」「松花(葉か?)酒」の記述が見られる。

4 もしこの推論が正しければ、居易自身は自分の病態を「脚氣」と認識していた可能性がある。

5 居易が「風痺」と記した疾患は、いわゆる唐代の疾病概念からすれば、「中風」(厳密には「卒中風」)には該当しない。

6 肘に「柳」(＝瘤)ができたという記述のように、リュウマチ結節を思わせる症状が書かれており、また左下肢の運動障害を訴えてはいるが、痛みに関する記述が見られない。このことから中国医学的な解釈では、厳密にはいわゆる「痺証」ではないと言つべきである。ただ唐代の古典の記述では痛みが必ずしも無い場合も痺証定義にあるため、当時においては「風痺」という言い方も誤りではなかったと言える。

7 居易は「痺」の用語を医学用語としての痺証の意味ではなく、「しびれ」の意味で用いた可能性を否定できない。

【文献及び注】

- 1 小高修司：白居易(楽天)疾病攷、日本醫史学雑誌四九(四)六一五・六三六、二〇〇三
- 2 『諸病源候論』(巢元方、六一〇年編纂)
『中国医学古典と日本』(小曾戸洋著、塙書房、一九九六年刊)によれば、本書五〇巻は、諸々の病気の原因と証候を論じた一大病因病態学書で、隋代に編纂された現存する唯一の医書である。一〇二六年に刊行された北宋版は佚書であるが、この宋刊本を伝えると考えられている諸本の中で、宮内庁書陵部所蔵南宋版が現存最古の孤本である。本拙稿には本書の影印本である東洋医学善本叢書(東洋医学研究会刊、一九八一年)を用いた。
- 3 『外台秘要方』(王焘、七五二年脱稿)

同じく『中国医学古典と日本』によれば、本書全四〇巻は、各項目の初めに『諸病源候論』を引用して病因・病態を論じ、次に種々の方書に記された治療法を列記している。この編集法は『医心方』など多くの書に踏襲されている。一〇六九年に北宋国子監より校刊され、

現伝する諸本のうち、静嘉堂文庫所蔵本は、全巻を完具する唯一のものである。本拙稿には本書の影印本である東洋医学善本叢書（東洋医学研究会刊、一九八一年）を用いた。

4、日本での中風説（下定雅弘の情報による）

イ（今井清「白楽天の健康状態」、『東方学報』p. 四一〇京都第三六冊、昭和三九年「一九六四」一〇月）に「六、中風に罹る」の章題をつけて「酒に目がない罰として、六十八歳の冬十月六日の朝に中風に襲われる。……彼は、その原因を老衰に帰しているが、単にそれだけではない。知れたことだが、過度の飲酒による動脈硬化である。右側の血管から出血して左足が利かなくなったのである。不幸中の幸いというべきは、運動神経の中枢が侵されただけで、思考・記憶・言語の障害は全く見られない。……」としている。

ロ（埋田重夫「白居易詠病詩の考察―詩人と題材を結ぶもの―」、『中国詩文論叢』p. 一〇三、一九八七）は、「白居易の主な疾病は、眼病・肺病・風痺（中風）の三つに大別される」とある。

ハ（三浦国雄「白楽天における養生」（平凡社、荒井健編『中華文人の生活』、一九九四、一）。創元社『気の中国文化―氣功・養生・風水・易―』、p. 九九、一九九四、六）に「文人と養生 ―白楽天の場合―として収載）「……この中で最も深刻な病が六十八歳の時に見舞われた「風痺の疾」（中風）であるが……」、同p. 一〇一「風痺（三六）」として、p. 一四一注三六に「これは中風としてよろしかろう。白居易自身も「自中風来三歴閏」（巻三十七「詠身」、七五歳）」と述べる」と記している。この「中風」は「風に中る」の意で、「中風」だという証拠にはならない。

ニ（大平桂一「日々と四季の健康法」（平凡社『中華文人の生活』p. 一六四、一九九四）は、「白居易（七七―八四六）は若いころから自分の健康に大きな関心を持ち、……完全な健康への希求や昇仙への強い執着からある程度逃れる契機となったのは、晩年洛陽で隠棲していた彼を襲った中風だった。（以下、訳）開成四年（八三九）、病弱の私も六十八歳になった。冬十月甲寅の日の朝に、始めて麻痺の病にかかった。……」と記している。

5 『諸病源候論』中風候

中風者風氣中於人也風是四時之氣分布八方主長養萬物從其鄉來者人中少死病不從鄉來者人中多死病其為病者藏於皮膚之間内不得通外不得泄其入經脈行於五藏者各隨藏府而生病焉

6 『医心方』巻第三 風病證候第一

《小品方》云：説曰：風者、四時五行之氣也、分布八方、順十二月、終三百六十日。各以時從其鄉來為正風

7 卒中風方七首

崔氏小續命湯、療卒中風欲死、身體緩急、口目不正、舌強不能語、奄奄惚惚、神情悶亂

8 風偏枯候

風偏枯者由血氣偏虛則腠理開受於風濕風濕客於半身分腠之間使血氣凝滯不能潤養久不差真氣去邪氣獨留則成偏枯其狀半身不隨肌肉偏枯小而痛言不變智不亂是也……男子則發左女子則發右若不瘡舌轉者可治三十日起

9 風半身不隨候

半身不隨者脾胃氣弱血氣偏虛為風邪所乘故也脾胃為水穀之海水穀之精化為血氣潤養身體脾胃既弱水穀之精潤養不周致血氣偏虛而為風邪所侵故半身不隨也

10、小高修司：八味丸と六味丸の方意を歴史的に考ふる、漢方の臨床五二（五）七七七一七八四、（六）九三三一九四三、二〇〇五

11、論何以得之於脚、

問曰、風毒中人、隨處皆得作病、何偏著於脚也？答曰、夫人有五藏、心、肺二藏、經絡所起在手十指、腎、肝與脾三藏、經絡所起在足十指、夫風毒之氣、皆起於地、地之寒暑風濕、皆作蒸氣、足常履之、所以風毒之中人也、必先中脚、久而不差、遍及四肢腹背頭項也、微時不覺、痲滯乃知、經云次傳、間傳是也。

12 論得之所由、

凡四時之中、皆不得久立、久坐濕冷之地、亦不得因酒醉汗出、脫衣靴襪、當風取涼、皆成脚氣。若暑月久坐、久立濕地者、則熱濕之氣蒸入經絡、病發必熱四肢酸疼煩悶。若寒月久坐、久立濕冷地者、則冷濕之氣上入經絡、病發則四體酷冷轉筋。若當風取涼得之者、病發則皮肉頑痺、諸處詩動、漸漸向頭。

13、脚氣寒熱湯酒方一十首

十二風痺不能行、服更生散數劑、及眾療不得力、服此一劑便能遠行、不過一、兩劑方。松葉六十斤。右一味、咬咀、以水四石、煮取四斗九升、以釀五斗米、如常法。別煮松葉汁以漬米、並饋飯釀、泥封頭七日發澄、飲之取醉、得此酒力者甚眾、神妙。（並出第七卷中。）

14、脚氣痺弱方七首

《千金》松脂散、主一切風、及大風脚弱風痺方、薰陸法亦同。取松脂三十斤、以絞皮袋盛系頭、鐵鎚底布竹木、置袋於上、右押之、下水於鎚中令滿煮之、膏浮出得盡、以後量更二十沸、接取置於冷水中、易袋洗、鎚更煮如此九遍藥成、搗篩為散、以粗羅下之、用酒服一方寸匕、日二。初和藥以冷酒、藥入腹後飲熱酒行藥、以知為度。如覺熱即減、不減令人大小便秘澀、宜令蔥羹、仍自不通、宜服生地黃汁、微取泄利也。降忌大麻子以外、無所禁。若欲斷米、加茯苓與松脂等分、蜜和為丸、但食淡抹餈日兩度、一食一小碗、勿多食也。作餈餈法硬和抹熟按煮五十沸、漉出冷水淘、更置湯中煮十餘沸、然後漉出食之。服松脂三十日後自覺有驗、兩脚如似水流下是效。如恐秘澀、和一斤松脂、茯苓與棗栗許大、蘇即不澀。服經一百日後、脚氣當愈。

15、目眩用語が見られる詩作の例

游悟真寺詩一百三十韻：元和九年秋、八月月上弦。：目眩手足掉、木敢低頭看。（四三歲）

登香爐峰頂：上到峰之頂、目眩神恍恍。

時世妝：斜紅不暈赭面狀

畫竹歌、並引：蕭郎蕭郎老可惜、手顫眼昏頭雪色

16、干祖望：孫思邈評伝 p p . 一 一 二 四、南京大學出版社、二〇〇二、南京

17 『外台秘要方』風濕方九首

辨中風、偏枯、風痲、風懿、風痺。偏枯者、半身偏不隨、肌肉偏不用而痛、言不變、智不亂、病在分腠之間、溫臥取汗、益其不足、損其有餘、乃可複也。風痲者、身無痛、四肢不收、智亂不甚言、微知可療、甚則不能言、不可治也。風懿者、奄忽不知人、咽中塞窒然、舌強不能言、病在藏腑、先入陰後入陽、治之先補於陰、後瀉於陽、發其汗身轉軟者生、汗不出身直者七日死。風痺病不可己者、足如履冰、時如入湯、腹中股脛淫濼、煩心頭痛、嘔

眩、時時汗出、自眩悲恐、短氣不樂不出三年死。

18、風痺方三首

《病源》風痺之狀、身體無痛、四肢不收、神智不亂、一臂不隨者、風痺也。時能言者、可治。不能言者、不可治也。（出第一卷中。）

19、風濕痺候

風濕痺病之狀或皮膚頑厚或肌肉酸痛風寒濕三氣雜至合而成痺其風濕氣多而寒氣少者為風濕痺也由血氣虛則受風濕而成此病久不差入於絡經搏於陽經亦變令身體手足不隨

20、風痺候

痺者風寒濕三氣雜至合而成痺其狀肌肉頑厚或疼痛由人體虛腠理開故受風邪也病在陽曰風在陰曰痺陰陽俱病曰風痺：冬遇痺者為骨痺則骨重不可舉不隨而痛骨痺不已又遇邪則移入於腎其狀喜脹

21、素問『長刺節論篇第五十五

病在骨、骨重不可舉、骨髓酸痛、寒氣至、名曰骨痺

22、風痺手足不隨候

風寒濕三氣合而為痺風多者為風痺風痺之狀肌膚盡痛諸陽之經盡起於手足而循行於身體風寒之客肌膚初始為痺後傷陽經隨其虛處而停滯與血氣相搏血氣行則遲緩使機關弛縱故風痺而復手足不隨也

23、下定雅弘：白樂天の世界、勉誠出版、二〇〇六

24、風頭眩候

風頭眩者由血氣虛風邪入腦而引目系故也

25、『医心方』卷第三 風病證候第一

《小品方》云：說曰：風者、四時五行之氣也、分布八方、順十二月、終三百六十日。各以時從其鄉來為正風、在天地為五行、在人為五臟之氣也。萬物生成之所順、非毒厲之氣也。人當觸之過、不勝其氣乃病之耳。雖病、然有自瘥者也、加治則易瘥。其風非時至者、則為毒風也。不治則不能自瘥焉。今則列其證如下：

冬壬癸水、北方寒風。傷之者為腎風、入腰股四肢腎俞中。為病多汗惡風、腰脊骨肩背頸項痛、不能久立、使出曲難不利、陰痺、按之不得小便、腹脹、面皴然有澤、腫、時眩、顏色黑。令人厥。

26、頭面風候

頭面風者是體虛諸陽經脈為風所乘也諸陽經脈上走於頭面運動勞役陽氣發泄腠理開而受風謂之首風病狀頭面多汗惡風病甚則頭痛又新沐中風則為首風又新沐頭末乾不可以臥使頭重身熱反得風則煩悶診其脈寸口陰陽表裏互相乘如風在首久不差則風入腦變為頭眩養生方云飽食仰臥久成氣病頭風

27、治頭風方第七

《耆婆方》又云：治人風氣、風眩、頭面風、頭中風病六時散方：

又云：治人風氣、風眩、頭面風、中風、濕痺脚弱、房少精、八風散方：

28、小高修司「瘡」の病について——移精变氣を踏まえて——、中医臨床二六（二）二四八・二五二、二〇〇五

【謝辞】

下
定
雅
弘
教
授
に
は
度
重
な
る
ご
教
示
を
戴
い
た
。
こ
こ
に
深
甚
の
謝
意
を
表
す
る
。